還暦のアメリカ一周(2005 年記)

旅に出るまで

今年の二月に還暦を迎えた。そして六月半ばに退職した。

残る人生は私のもの、この際ずっと以前から考えていた自動車でアメリカ一周旅行を実行することにした。

とはいえ、実際に旅に出ると決めても、さて一体何をどうするというのが全く判らない。お手本も無い。第一、本当に一周出来るのかどうか一抹の不安と、やると喧伝して出発後にやっぱり途中で帰った時みっともないというミエとで余り他人には言わずに置こう。少数伝えた人達は、皆、一人旅と自動車旅行ということに心配の色を浮かべたから。

出ると決めてからというもの次の点に悩んだ。

先ず旅程。今まで業務出張は何度もしているが、自分で好きなようにとなると、このアメリカ、どこから始めればよいのか。原点に戻って、何故一周したいのかを考える。昔、父が購読していた雑誌の一つに、日本版リーダーズ・ダイジェストがあった。このリーダーズ・ダイジェストの記事に、マンモス・ケーブという世界最長の鍾乳洞の話があった。これを読んだのが、確か小学生か、中学生の頃。それ以来、一度ここに行ってみたいという憧れが心の隅にずっとあった。思えばこれが、私がその後アメリカに住むようになった基本の動機ではなかっただろうか。アメリカに来たのは 37 年前である(私は 23 だった)。行ったことのない場所は一杯ある。

いくらなんでもケンタッキーのマンモス・ケーブだけで一周とはいかない。ケーブに続いて、多くの友人から聞いたニュー・オリンズのジャズがある。そうだ、この2つを中心にしよう。私はアメリカ全州の地図を前に、そう決めた。

次は、一日どれだけ走れるのか。例えばニューヨークからシカゴまでなら、直線距離は約750 マイル(1200 キロ)だから、頑張れば一日か二日で着いてしまう。とはいえハイウェイのどれを選ぶか、混み具合、制限速度、ハイウェイの施設状況(トイレ・ガス・食堂はあるか)、無理をせず毎日続けて走るとしたら、一体どれくらいが自分に適正なのか、皆目見当がつかない。だから、ホテルは、出発日と、その次の日のみ予約を入れるだけにした。ラップトップ持参で着いたところ勝負とする。

三番目には、レンタカーをするか、自分の車で行くか。実はレンタカーを薦めてくれる友人が多かった。途中でエンコしたり事故の場合、代替車が容易であるという尤もの理由である。とはいえ、ルートも決まらず期間も不明、それに山の中で故障であれば、自分の車だろうとレンタカーだろうと、時間を食うのは一緒である。又、以前、冬にシカゴに出張した時小型レンタカーがハイウェイで吹雪に飛ばされそうな気がして怖かった記憶もある。そこにいくと私の車(98 年型、ビューイックのパーク・アヴェニュー)は古いけど八気筒で馬力はあるし重いし第一運転に慣れている。それで自分の車で行くことにした。そのかわり、この古い車をオーバーホールに出して隈なくチェックしてもらう。

最後に、コストはどれくらいみたらいいのか。退職の身、もう定収入は無い。出来る限りケチらなくては。とはいえ私も女の端くれ。若者の貧乏旅行のように、駅の待合室とか、畑で野宿、という訳にはいかない。(ヘタしたら売春容疑で留置場だ。)宿については、ウェブで、コートヤード、クォリティー・イン、ディズ・インといった、お手軽で家族向きのモテルのネットで検索した。判ったのは、NYから西海岸までは、南経由であればどの道を取ろうと、余り問題なくモテルも確保できそうだということ。だが後半の北の方、例えば、アイダホ、モンタナ、ワィオミングといった州だと、急にモテルもまばらになる。値段は逆に安い。(何故かというのは行ってみて判った。)寝るだけと覚悟を決めれば何とかなりそうだ。お握りで何日かは持たせるとし、こ

の際減食ダイエットもするか、という気で食費は掛けない。お米を六合と、小型炊飯器（一合から炊ける）それに、焼き海苔、梅干、インスタントの味噌汁と日本人丸出しの食料若干、水筒とお茶のパック、お皿、コップ、ナイフ、フォークの類を詰める。衣類も最低限にする。モテル代、ガソリン代、食費、一日平均 150ドルと見て旅程を 35 日から 45 日として、5,000－6,000ドルと見た(55 万円- 66 万円)。老年の貧乏旅行としては高いけれど還暦の記念と思えば安い、と勝手に納得。

出発

8月7日朝9時に家を出る。前の晩、ミケルとマリさんと食事をした。万が一を考えて、私の重要書類の有る場所を確認しておく。ミケルはうんうんと言うのみ。

ハイウェイ I-95 に乗って南下。140 マイル。ボルチモアに到着。最初の日だから様子見としても、エッもう着いちゃったの、という距離。3 時間弱。まだお昼。でも、最初だし何となく緊張しているから、モテルで最初の荷解きをする。まずpcを接続しなくては。翌日以後の宿が無い。

pcについて言えば、モテルによってpc接続はワイアレスのみの場合と電話線で接続とがあるが、これからは旅行にはワイアレスの時代だと思った。

アメリカ国内であれば、どちらでも何とかなる。強いていえば、テキサスとか、モハヴ砂漠とか、大平原、森林地帯、山岳地帯では、ケーブルのある所がいいが、都会であればワイアレスが便利。

それに今は自前のラップトップがなくても、多くのモテルのロビーにはpcが用意され自由に使えるようになっている。宿に施設が無い場合でも、近くのモテル同士で頼み込めば使わせてくれる。その辺は鷹揚である。自分の部屋で接続した場合多くは無料、デイズ・インでは、場所によっては、一回接続毎に 50 セントということもあったが言うほどのコストでは無い。自分のラップトップがあれば、旅行中何処でもメールは読めるし、既に設定してあるから日経、産経、読売、朝日、共同、どのニュースも読める。それに既に入力してある自分のファイルを全部持っていくのと同じだからpcを開けることで気分が落ち着く。この旅で精神的に安定していたのはpcが大きな要素であった。

マンモス・ケーブ

最初の日が軽かったのに気をよくして、一日平均行程を 300 マイルとする。3 日目に着いたのが、ケンタッキーのマンモス・ケーブのあるケーブ・シティ。全長 350 余マイル（550 キロ）とかで、世界最長だとか。最大と言わないところをみると、ロシア大陸にはもっと大きいのがあるのだと。

ケーブ・シティ近くになってハイウェイの両側にケーブの広告板がずらりと並んだのには驚いた。クリスタル・ケーブ、ケーブ・アンダーシティ、ケーブ・グランドと似た名前。エッ、マンモ

ス・ケーブっていう鍾乳洞はひとつじゃないの？何とかケーブといういくつもの広告板にはハイウェイの出口番号がついているが、これが、皆バラバラ。その日泊まる宿の近くに土地の商工会議所のやっている事務所があるので寄ってみる。定年間際みたいなオジサマが独り（私も同じだけど）。広告板とマンモス・ケーブの関係は？と聞くと、一番大きいマンモス・ケーブ国立公園は国が管理しているが、あとは個人の土地持ちが営業しているのだそうだ。どちらがいいか？鍾乳洞に何を期待するか。国立のは設備はしっかりしているが、個人のも、偶々そこに大規模な結晶があれば見る価値はあるよ。さすが商工会議所、そつがない。

翌日、国立公園に行く。

切符を買う列に並ぶ。職員は皆国家公務員。家族が大勢並んで列をつくると、すかさず「ここは切符を買う人が並ぶところだよ。こっちはお金さえ貰えれば切符を出すだけだからね。コンサルタントじゃないんだよ。お金を持っている人が一人だけ並びなさい。」エラく現実的だなぁ。

切符を買うのにもクレジット・カードが使えるのには感心した。

ツアーはいくつもあって、目的別となっている。値段も様々。

値段は所要時間にほぼ比例している。コンサルタントではないといわれた職員はとても親切で、色々教えてくれた。最初は歴史ツァー。ケーブの入り口まで行くバスの番号と、ツアーの時間がプリントアウトしてある。バスに乗る前に、添乗員が皆を集めて言い渡す。「切符の裏を読んで下さいね。」

読んだら、このツァーで合う一切の危険、損害、損傷については責任を負いません、だって。

追いかけるように、「このツァーは階段があります。階段を降りることが困難な人、高所恐怖症の人、閉所恐怖症の人がいたら、このツァーはあなた向きではありません。今のうちに辞めて下さい。お金は返します。」これが政府のリスク管理か。

歴史ツァーは確かに発見された時代と、その後の発展をみるものであったが、私は、中学生の時、秋吉台の秋芳洞で黄金柱、百枚皿、青天井、千畳敷などを見ている。マンモス・ケーブと比べれば小さいけれど、面白味はずっとあった、という記憶がある。そこで、次のツァーは、フローズン・ナイアガラ（凍結したナイアガラ）という名前のに参加した。これは、正解。添乗員が得意げにレーガン大統領も訪れたと言っていたが、鍾乳石の結晶の規模と華やかさでは、黄金柱を遥かに上回るいつまで見ても見飽きない自然の芸術品。

長い階段を苦労して降りた甲斐があった。